

特集 教育・協同を考える／地域教育連絡協議会

自己の成長をいきいきと感ぜられる学びを求めて

森 光 男（東京都／地域教育連絡協議会）

この春、東京高田馬場に高校生を対象にした新しい「拠点」が一つ誕生する。「ジャンプ教室」というのがそれだ。高校生、青年に対しては「新しい学びを一緒に作ろうよ。」とよびかけ、大人たちに対しては「子どもたち・若者たちと一緒に考えながら私達も『生き方』をもう一度考えてみませんか？」と支援を呼び掛けている。

この「教室」も含めて私達地域教育連絡協議会（略称地教連）には首都圏を中心に20数団体の塾・教室が加盟し、また少なくない研究者・個人も主旨に賛同し個人加盟をして様々な協力をして下さっている。

ここでは地教連に加盟する「地域塾」の運営とその基礎にある「理念」について簡単に報告すると共に地教連という組織についても紹介したい。

今、教育の分野では学校5日制や、「新学力観」の導入、さらに学校からの偏差値排除、高校教育の多様化、入試制度の大改革など大きな「変化」の中にある。それは21世紀の激動する不透明な社会にあっても「日本人としてのアイデンティティ」を見失わず「主体的に行動できる人間」を求める、支配の側からの強力な「改革へのメッセージ」であった。そこにはまた日本を「キャッチアップ体制」から「世界のフロントランナー」として位置付け直しながら「日本的経営」の根本的な再編成を狙う財界の意図が背景にある。

そうした動きの中には現実の困難の中で苦しみもがく子ども・青年の現実を正面から捕らえきれないという点において多くの矛盾を内包するものであるが、同時にこうした一連の「改革」が提

起されてきた現代日本の経済的社会的底流を見るとき、民主的な教育運動の主体的働きかけの中で従来政府文部省と財界自身がとってきた教育政策を民主的に転換しうる可能性も見えてくるように思う。

この一見不透明な中で子どもと父母の心は大きく揺れている。

現代の父母はわが子が通うことになる地域の公立中学の日常的な「荒れ」を見ながら「私立を受験させようか」とたいがい迷う。「でもこんなに小さいうちからかわいそうだしお友達のあの子と一緒にだからやっぱり公立へ」と希望してもその公立中学はやはり厳しい巧妙な競争の教育システムが支配的で、期待していた「友達との仲間集団」も逆にイジメに端的なように「自分を出さない」賢い生き方を子どもたち一人一人に強いる。地域の父母と子どもたちは学校を見限っているのではなくかつての希望のトリデとしての学校への期待をわずかにでも持っているがゆえによけいに「苦しまされる」のである。

われわれ「地域塾」はこうした中で、一つには学校とは違って『安心して学べる場』『分からないことを親身になって相談にのってくれる場』というかつての学校が本来保持していた「教育の原点」ともいべき機能を、現実の地域共同体の「解体」と学校の地域からの遊離という現実の動き中で「学校」にかわって持ち始めてきている。それは「補習塾」と呼ぶものとはすでに質的に異なる意味をも持つ。なぜならば「補習」の対象としての学校そのものがすでに「教育の機能」をマヒさ

せてきている現実があり、その中で現実に保障すべき「学習・発達」の課題あるいは進路保障という子どもからの「まっとうな」要求に対して目を向けようとしなくなってきた現実があるからであり、地域とその「地域塾」からすれば学校は「補うべき価値」を既に失い始めてきている状況が広がってきているからである。「地域塾」もまた社会的存在であり「競争的教育」とそれと結び付いた学校をふくむ教育システム全体を相対化することは現実的ではない。しかし「地域塾」今、何か「補うべき価値」があるとすればそれは「競争的教育」に自ら乗ろうとする「学校」教育の中にではなく現代日本の子どもと地域が現実に抱えている課題に目を向けてこそ見出だせるように思う。

こうして今「地域塾」は「補習塾」としてではなく「子どもたちの発達と進路を現実に保障する地域の協同の子そだて・教育センター」的な性格を持ち始めてきている。

現実に地教連加盟の「地域塾」の多くが、子どもたちが現実に抱える「イジメ」や「低学力」の問題を実際に引き受けながら相談にのり地域の様々な人達と協力しながら解決に努力している。そうしたなかでそだった子どもたちが「地域塾」の次の担い手になったりあるいは地域の平和運動の担い手たちへと逞しく成長してきている現実も生まれてきている。昨年東京で開催された「高校生平和ゼミナール」の中心的担い手たちの少ないメンバーはそうした「地域塾」のいくつかで小中学生の頃から学び会い成長しあってきた高校生と青年たちなのである。

ここで見てくるのはもう一つ「地域塾」の顔は、子どもと青年の「もう一つの学び」の追及の場であるということである。

現実の「学び」が子どもたちから遠ざかり逆にその「生」を疎外するまでになっている現実がある。そのなかで子どもとりわけ中学生や高校生徒たちは今「もう一つの学び」、「競争にがんじがらめにされた『学習』でなく自己の要求と世界の現実に深く根差した学習、自分の成長をいきいきと

感じられる学び」を真剣に求め始めている。その要求を丁寧うけとめることから既存の学校では実現できないような「学習」と「活動」を生み出してきている。

前記の「高校生平和集会」への取組はそのひとつの例であるが「地域塾」の少ない塾が「イジメ」の問題を授業にとりあげたり、人権や平和についての特別な学習をコツコツと続けてきている。ここで強調したいことは「地域塾」の中では、こうした子どもたちの思春期の節目の時期にこのような人類的課題へとつながる大きな問題を正面から論じ合う仲間と「大人」「青年」に触れ合いながら子どもたちの集団が丁寧に育てられてゆくということなのである。こうした中では「受験」に揺れることでさえも否定されるのではなく時に「教材」となり、ともに「乗り越えられるべき課題」へと高められる。子どもたちにとって現実のなかで動揺したり荒れたりする余裕を持てる場所が「地域塾」なのである。

こうした「地域塾」の運営は多くが決して楽ではない。その原因については省略するが、運営を安定的にするための重要な「仕組み」として「地域との協同」の方向が模索されている。

この3月から開校した川崎の「あらぐさアカデミア」は、母体となった「あらぐさ教室」のスタッフと関係者が協同で「出資」し「サポート基金」を作り発足させた。それは「友の会」と「運営委員会」に支えられながら「高校生の新しい学び」の場として勧められようとしている。その中心には30才の青年がすわる。課題は山のようにあるがしかしそこには確実に「地域に根差す教育」の現代の姿が見えるのである。

地域塾の第3の顔はこうした地域の子育て教育協同の実際の取組の「核」になってきているということだろう。

〔あらぐさ教室〕
044-751-0241

最後に、こうした「地域塾」が加盟する地教連について若干ご紹介したい。

地教連は1989年に首都圏の「地域塾」の幾つか

中心になり周辺の塾に結集を呼び掛けて発足した。すでにそれ以前から3つの塾は研究と交流を続けてきておりそれを引き継ぐ形で毎年秋には「地域教育交流研究集会」を行っている。昨年は東京都世田谷区で第11回集会を行い、塾関係者をはじめ地域の父母と青年や研究者の方々130名が参加された。そこでは新たな試みとして中学生のディスカッションの場も設けられ大きな感動を呼んだ。(後日報告集がまとめられる予定)

また3回ほどの「研究例会」を行い「学力論」や「教育政策」「塾運営問題」など幅広い議論と交流の場をつくっている。さらに「教科研究会」として「数学・算数」「国語(日本語)」「英語」「特別カリキュラム」などの研究会を行っている。

地教連に加盟する「地域塾」はその理念や運営形態は実に多様である。したがってそれを地教連という「枠」で縛ることのないように厳に戒めている。しかし、同時に教育の矛盾が激化する中で「地域の教育ネットワーク」を追及することと「子どもたちの発達保障と進路保障」を統一して進めること、そしてそのためにも地域の父母住民との協同と、公教育との「批判しつつ連帯する」という関係を共有しながら進めてきている。

以上で紙数も尽きた。今後さらに大きな変革が予想される。そのなかにあって「地域塾」と地教連は地域に根差し子どもたち青年たちに心を寄せ連帯しながら未来を切り開く大道を進んでいきたいと考えている。

地域教育連絡協議会

品川区中延5-6-14

エルムアカデミー内

TEL 03-3784-5676

FAX 03-3788-1592

担当：大貫

JUMP 教室

96年3月開講

高校を中退して大検をめざす生徒や、夜間高校、通信制高校の生徒が昼間に学べる学習の場をつくっていきます。

中学校を卒業してからの生活に悩んでいるひと、高校生活に疑問を感じているひと、

これからの進路に不安を感じているひと、
みんなあつまれ!

ご相談ください。

JUMP教室：TEL.03-3368-6929

新宿区高田馬場3-7-5

グリーンハイツ202

藤井 智：TEL.0425-91-1548

(午前中又は深夜)

